『祝辞の方法』

作・吉中詩織

【作品の登場人物】

佐々木優愛…２５歳。
竹川千春…２４歳。
大谷理央…２４歳。この舞台には現れない。
影たち…第三者の姿。優愛と千春意外の役割を担う。男女２人で演じる。

（役者、計４名）

【あらすじ】

「話したいことがあるの。」と幼馴染の理央から連絡がきた優愛と千春。
いつも一緒だった。小学生の時も、中学生の時も、高校生の時も、大学生の時も、社会人になっても。誕生日は必ず、３人でお祝いした。いつもの、秘密基地で。２５歳になった今だって、友達、親友、のはず、なんだ。ずっと続けられると、思っていた。
でも、それもきっと終わってしまうんだろう、と、「話したいこと」を待っている間に、何となく気付き始めている。
それはきっと、「おめでとう」と言わなくてはいけないこと、なのにどうしても「おめでとう」と素直に言えないこと、なのだと思う。
いつの間に、こんなに窮屈になってしまったのだろう。昔のことまで遡る。
嗚呼、私はただ。無条件に、慈悲深く、ありたい。ただ、それだけなのに。

【ねらい】

幼馴染の持ちかける「話したいこと」。もうすぐ２５歳、女性、独身、美人の彼女からの「話したいこと」とあれば色々な憶測が飛び交う。結婚、出産、俗にいう「女の幸せ」、なのだろうか、と。

これからやってくる理央は、彼女たちの届きそうで届かない「理想像」なのである。いくら待っていても自分に歩み寄ってきてくれることはまだまだ先、もしかすると一生歩み寄ってこない可能性もあるもの。二人はそんな「理想像」を待ちながら、浮遊した自分たちの感情の着地点を模索し、葛藤しているのである。

本当は心から祝福してあげたい。できる限りの慈悲深い目で。だが、この小さな世界の常識と価値観、生まれた時から身体に染み付いてしまった誰が決めたかわからない決まり事は、なかなか思い通りにさせてくれない。そればかりか、浮遊している自己欲求ばかりが増幅してしまい手の施しようがない。どんどん醜く黒く染まっていく自分の世界を見て絶望さえしてしまう。

このような葛藤やもどかしさはいたるところに存在している。家族、友人、恋人、他人、ペット、自然、物…全ての世界との関係の中に。一見否定されがちな感情だが、丁寧に紐解いていけば、この葛藤とは愛情の上に存在しているのではないだろうか。ものすごくぎこちなく、屈折し、不細工な愛情なのかもしれない。紐解かれるまでには時間がかかるかもしれない。しかしこの作品では、そんな泥臭く、不器用なイメージたちを肯定してあげて、最後に心の底から「おめでとう」と言わせてあげたい。そして、歩き続けた先でふと振り返ったとき、自分に「お疲れ様」と微笑むことができるように・・・。

舞台面は2つのエリアに分かれている。
一つは千春の部屋。中央には小さなテーブルのようなものがある。リアルな「お部屋」ではなく、色々なものが渦巻いて繭のようになってしまったような空間。ウエディングドレスのスカートの中、ヴェールの下のようなイメージ。以降「千春部屋」とする。
もう一つのエリアには沢山の額縁が飾られている。キーワードとなる言葉が記憶の断片のように散りばめられている。その中に一つだけ、何も書いていない額縁。記憶のエリア。ヴェール自体そのもののような。隠してしまう。社会的、常識的側面のかたまり。「社会エリア」とする。

千春は「千春部屋」から出ることはない。
優愛は「千春部屋」と「社会エリア」を行き来する。
影たちは「社会エリア」を漂う亡霊・夢のような存在。過去の記憶やイメージを体現する。「千春部屋」には関わらない。

「千春部屋」での会話は基本的に普通に交わされる。
しかし、第三者（影）との会話や、過去の出来事はリアルな距離感では行われない。
その記憶の中では、彼女たちは常にすれ違い、距離をつくり、たまに近づきそうになったとしても、それは一瞬の出来事である。

千春は開場前から人形のように眠っている。

優愛の祝辞

優愛、舞台袖から社会エリアに出て来ていそいそと観客に向かって話し始める。

優愛

ええ・・・ただいま、ご紹介にあずかりました、佐々木優愛と申します。理央とはもう、かれこれ２０年の付き合いになります。彼女は、いつ何時も、まさに、みんなの憧れの存在でした。どこのモデルかと思ってしまうほどの美しさを持ち合わせながら、明るく、気立てがよく、それなのに勉強もスポーツもできて…。天は二物も三物も四物も与えてしまったようです。自慢の親友です。…親友…だと、思っています。彼女もそう思ってくれていれば良いのですが。彼女は小学２年生の時に私の家の右隣に引

っ越してきました。昔から人懐っこい性格で、挨拶に来てくれた時の笑顔がたまらなく魅力的で、私たちはすぐに打ち解けることができました。
もう一人、私たちには親友がいました。**（千春、むくりと起きて缶ビールとコーラ缶をテーブルに準備する。）**その子の家は私の家の左隣にあって、小さい頃から彼女の家で遊ぶことが多かったので、せっかく歳も3人一緒だしと、私たちは彼女の家で遊ぶようになりました。その子の部屋はちょっとした秘密基地のようで、小学生の時も、中学生の時も、高校生の時も、大学生になっても、3人、そこに集まりました。社会人になっても、誕生日とかのお祝い事は絶対3人で集まりました。ずーっとずっと続いてた習慣。すごくないですか？（笑）同じ時間を…同じ時を過ごしてきました。私たちはいつも…一緒で、…いつも…。だから、聞かされた時は本当に驚いて…まさか私がここでこうやってご挨拶することになるとは想像していなくて、想像なんて、できませんでした。今でも実感が湧きません。あの日も、いつもどおり私たちはいつもの場所に集まることになっていて

千春　優愛ちゃん。

優愛、ゆっくりと振り向く。
千春、ビール缶を持ち上げて「これはどうするの？」という顔。

千春の部屋1

優愛　あ、やだやだ。**（「千春部屋」へ吸い込まれるように歩いていく）**
千春　ぬるくなっちゃうよ～。
優愛　だめだめそんなの。

優愛が飲もうとすると千春が「乾杯は？」という顔で缶を差し出す。乾杯。

優愛　あぁ！もうやっぱりぬるくなってやがる！ちょっと気も抜けてるし！何故プシュってやったあとに電話掛けて来るかね！？
千春　残念でした。
優愛　つまらん事務仕事の後のビールっていうこの時間が私の生き甲斐なのに！
千春　体に悪そう。
優愛　こんなことぐらいしか楽しみないの。明日の会議のこと考えて憂鬱になる前にしこたま飲んで寝る。そして忘れる。これ幸せ！

千春　不健康～
優愛　いいの！

千春　ねぇ、理央ちゃんのお誕生日会、どうする？
優愛　あーもう来週かぁ。
千春　そうだよー。
優愛　やだねー。とうとう２５かい！アラサー！
千春　すごいね！ねぇ！すごいね！
優愛　ねぇ、もうこの歳になったんだからさぁ、いいんじゃない、やんなくて？
千春　だめだよ！
優愛　今年もどーせ色んなところから誘われてるだろうからさぁ、私たちがわざわざ祝わなくても誰か祝ってくれるって。
千春　だめ！これだけはちゃんとやらなきゃいけないの！どうしよっか？
優愛　なんかサプライズする？
千春　今更サプライズもないっしょ。
優愛　そっかぁ。
千春　まぁいつもどおりでいいんじゃない？プレゼントは来週用意してさ。
優愛　…飲まないの？
千春　あ。うん。まだシュワシュワ強くて。
優愛　それ私来る前からあいてんじゃん。
千春　でもまだ。
優愛　もう抜けてるって、炭酸。
千春　うーん。

おそるおそる飲む。まだ千春的には炭酸が残っているという反応。

優愛　えー？（**コーラを奪い飲む**）うえええええ！あっっっま！！！！！
千春　まだちょっとシュワシュワでしょ？
優愛　ぜんっぜんだよ。こんなのもはやコーラじゃなくてただの黒い砂糖水だから。
千春　えー
優愛　よくこんなの飲めるね。
千春　優愛ちゃん、シュワシュワ好きだもんね。
優愛　こういう飲み物は爽快感ないと意味ないから。逆に美味しいのそれ？
千春　うーん。私はこれでもいいんだぁ。
優愛　ふーん(納得いかない様子で)

千春　電話、一樹くん？
優愛　あぁ、うん。
千春　珍しいね、電話なんて。
優愛　そうだね。
千春　(様子を伺う感じで)何かあったの？
優愛　ん？…いや、別になんでもないんだけど、なんかちょっと話したいことあるらしいからこれから会えないかって。
千春　へぇ…(間)　なんだろうね。
優愛　さぁ。
千春　5年目だもんね。
優愛　え？
千春　優愛ちゃんと一樹くん。今日で。
優愛　よく覚えてるね。さすがだわ。
千春　覚えてるよぉ！だって優愛ちゃんのことだもん。
優愛　丸4年かぁ。
千春　…どうしたんだろうねぇ。
優愛　今日は「話したいこと」だらけだね。
千春　たしかに。
優愛　理央、何時頃来るの？
千春　もうすぐじゃないかな。
優愛　そっかー。…私行かなきゃかも。
千春　…行っちゃうの？
優愛　んー。来てーって言うからねぇ。
千春　でも、もうちょっとはいれるよね？
優愛　うん。もうちょっとね。でも、先にご飯つくってあげたいからさ。
千春　…そっか。
優愛　なに？
千春　…ううん。

優愛　…昨日、ごめんね。
千春　え？
優愛　いや、まぁ、社会勉強だって連れてっちゃったけど…多分無理させちゃっただろうなと思って。
千春　あ。
優愛　一樹も、よろしくって言ってたよ。

千春　…ううん。
優愛　…
千春　…カラオケってあんな感じなんだね！すごいよ。優愛ちゃんも理央ちゃんも歌手みたいだったもん！
優愛　そんなんじゃないよ。
千春　それに、初めて一樹くんに会えて嬉しかったし。
優愛　そっか。
千春　…気にしないで。
優愛　…ん。いつかまたみんなで行ければいいね。
千春　…うん。

（間）

優愛　なんだろうね。
千春　え？
優愛　「話したいこと」って。
千春　一樹くん？
優愛　両方。理央も一樹も。
千春　ああ…
優愛　聞いてる？
千春　え、聞いてないよぉ。
優愛　そうなんだ。千春はもう聞いてるのかと思ったけど。
千春　全然。全然まだ聞いてないよ。
優愛　ふーん。
千春　…。
優愛　でも
千春　え
優愛　なんとなく、ねぇ。
千春　…
優愛　なんとなく、そうだよね。
千春　んー…
優愛　理央だって鈴木ともう長いもん。
千春　9年と1ヶ月。
優愛　さすが。
千春　ふふ。（少し気まずい感じで鼻で笑う）
優愛　憧れちゃうよ。ずっと好きでいてもらえるとかさ。鈴木、ほんとずっとじゃん。いいよねぇ。まあ、もうそろそろ感はずっと漂ってるし。
千春　そうかなぁ。

それに理央昨日ずっと恋愛ソング歌ってたからね。
優愛　いや、理央ちゃん元々好きじゃんそういう曲。
千春　あ！しかも最後は木村カエラ歌ってたし！ゼクシィのCMのやつ！ばー
優愛　たふら～い♪
千春　たまたまだよぉ。
優愛　あーそうだよそうだよ。そんな気するもん。そうだそうだ。
千春　まだわかんないじゃん。
優愛　千春もなんか感づくもんあったっしょ？。
千春　うーん…
優愛　結婚かぁー。
千春　…
優愛　私たちが結婚する歳になるなんて、想像できなかったよね。
千春　うん
優愛　なんか子供の頃はさ、２５歳って完璧な大人だと思ってたのにさぁ、いざなってみたら全然なんだもん、全然変わんない。びっくりしちゃう。
千春　うん
優愛　(間。空元気に)一樹もそのことかなぁ～
千春　え
優愛　なんてね。
千春　あはは
優愛　あ！でもお正月にひいたおみくじもさ、縁談「吉」って書いてあったよね？
千春　そういえば、そうだったね。
優愛　これは何か意味があるなぁ。
千春　優愛ちゃん、ほんとそういうのこだわるよね。
優愛　…もうそろそろ、だしなぁ。
千春　そう、なんだね。
優愛　そうでしょ、実際。だってもう5年だし、この歳なんだよ？
千春　わたしは、わかんないや。
優愛　まぁ…私だってわかんないんだけどね。
千春　…
優愛　理央が結婚かぁ。
千春　まだそうかわからないじゃん。
優愛　千春が一番そうだってわかってるでしょ。
千春　んー
優愛　でも…正直、ちょっと複雑だよね。
千春　ふくざつ？

優愛　もしそうだとしたとき、それを聞いたとき、私、「おめでとう」って喜んであげられるかなぁ。
千春　…あげられない？
優愛　(少しの間)…だってずっと3人一緒だったんだよ？それを鈴木にとられるってなるとねぇ！やっぱり寂しいじゃん？私たちの理央をー！ってなるでしょ？可愛い理央を返せー！って。
千春　…うん。なるね。
優愛　でしょー。だってさ、結婚したら今までみたいに誕生日会とかできないよー？あんた寂しがるじゃん。そういうこと。ちょっとした親心？みたいな？
千春　親心。
優愛　そ、親心。
千春　…
優愛　親ならちゃんと喜んであげないといけないんだけどねぇ。
千春　うん。
優愛　ねぇ、私、ちゃんと「おめでとう」って言ってあげられるかなぁ。
千春　…
優愛　誕生日会は結婚祝いも兼ねることになるかなぁ～！理央と私の！
千春　…
優愛　あ、そろそろ。
千春　…
優愛　行くね。
千春　…うん。
優愛　私の分までちゃんと聞いといてあげて。
千春　わかった。
優愛　頼りにしてるよ。
千春　…うん！
優愛　じゃ、よろしく。またね。
千春　(出て行こうとする優愛を引き止めるように)　優愛ちゃん。
優愛　？
千春　……今日は……肉じゃが、だね。
優愛　…ふふっ！正解！

優愛、千春部屋を出て行く。

千春、缶をしまう。と同時に影の２人が幻影のように登場する。

千春の思考回廊

千春

部屋の、扉を、閉める。階段を１段、２段、３、４、５、６、７、８、９、１０、１１、１２。靴を、右、左。姿勢を正したら、玄関のドア。あける。家の中と、身体の中が、新しい風で洗われる。さっきとは違う自分に生まれ変われたような気がして意気揚々と大通りに向かって走り出す。**危ない！**という声が頭に響く。突っ切っちゃだめ、いっつもきつく言われてた。優愛ちゃんと私は言いつけを守ってたけど、理央ちゃんは、こっそり突っ切ってるのを、私は知ってる。「理央ちゃん待ってよー！」と言いながら少し行ったところの横断歩道を渡ると商店街のガード下。本屋に豆腐屋、その隣の肉屋のおばあちゃんはいつもいい匂いの消しゴムとか可愛いシールとかをくれる。中華料理屋に八百屋、洋服屋。どこもみんな顔見知りだけど、ゲームセンターだけは入っちゃいけない。怖いお兄ちゃんに誘拐されちゃうんだって。でも、右に曲がるとすぐに交番があるから、何かあれば、おまわりさんが守ってくれる。階段を駆け上がったらもうすぐ駅。駅員さんが急かすように改札ばさみを鳴らしてる。カッカカカカッカッカカカカ。ホームで電車を待つときも、電車に揺られるときも、その軽快なリズムは身体の中で鳴り続けてて。カッカカカカカッカッカカカカ。彼の家に近づくにつれてどんどんどんどん高鳴ってく。カッカカカカカッカッカカカカ！ドアを開けると、ふわっと、柔らかい香り。きれいに、片付いている部屋。片付けたのは、この家の主、ではない。整った、その場所で。彼女は、野菜を洗いだす。じゃがいも、にんじん、タマネギ。ことこと、ことこと、ことこと。煮込む。そのうち、彼が帰って来る。

ただいま。

おかえり。

肉じゃが？

うん。

いいねぇ。

そう言って、笑い合う。の、だろうか。そして肉じゃがをつつき合って、美味しかったよ、なんて頭をなでる、の、だろうか。

優愛と一樹の一年目記念日

優愛　　ねえ。

一樹　　ん？

優愛　　話したいことって何？

一樹　あれ、俺なんかそんなこと言ったっけ？
優愛　え、言ってたじゃん、電話で。
一樹　まじ？なんだろ？
優愛　知らないよ、そんなこと。
一樹　あ！あれか。
優愛　何？
一樹　いや、この前、ゼミの研究発表あるって話したじゃん？
優愛　え…うん。
一樹　それをさ、教授が結構気に入ってくれちゃって、色々話してたら来週カナダの学会についていくことになっちゃったんだよねぇ。
優愛　へ…えぇ～、すごいじゃん！
一樹　いや、すごくはないんだけどね。
優愛　でも、来週って随分急な話だね。
一樹　まぁね。でもほら、俺ってフットワーク軽いのがイメージっていうか、セールスポイントってところあるじゃん？
優愛　そ、そうだね。どれくらい行ってるの？
一樹　あ、でもそんな行かないよ。２週間だけ。
優愛　…それでも２週間行くんだ。
一樹　すーぐだよ、すぐ。あっという間。
優愛　…
一樹　聞いてる？
優愛　あ、うん。良かったね。
一樹　おー。
優愛　頑張ってたもんね。
一樹　いや、頑張ってねーよ別に。
優愛　ううん、私は知ってるよ、頑張ってたの。うまくいくか、いかないかっていう結果が重要じゃなくてさ、やっぱりそこに意味があるんだと思うんだよね。
一樹　意味。
優愛　うん、その真摯な姿勢ってのがさ。
一樹　あーんー
優愛　私はそういうのが大切だって思うなぁ。
一樹　…
優愛　とにかく、良かったね。
一樹　…
優愛　ね？

一樹　ん…
優愛　…話変わるけどさ
一樹　ん？
優愛　今日…
一樹　うん。
優愛　なんの日か覚えてる？
一樹　え？
優愛　え…忘れちゃったの？
一樹　え、今日？あれ、なんだっけ？
優愛　えーさすがに覚えててよー。頑張ろうよー。
一樹　あ…
優愛　うん！
一樹　き、ねん、び？(歯切れの悪いかんじ)
優愛　自信もってよ。
一樹　記念日だね。
優愛　なんの？
一樹　二人の…
優愛　…
一樹　え、もしかして…もう一年ぐらい経っちゃったの？
優愛　ぐらいって…
一樹　え、はや。一年はやっ
優愛　まぁね。
一樹　やべーよ、この前二十歳になったばっかなのに、このままじゃすぐおっさんだよおっさん。アラサーだよ。
優愛　ねぇ、忘れてたの？
一樹　いや、忘れちゃいないよ。ただ確かじゃなかったっていうか。
優愛　ふーん…
一樹　ほら脳細胞って二十歳過ぎると壊れてくって言うしさー。俺ももう壊れ始めてるんだわ、多分。がらがらがら～
優愛　え、そんなんだったらさぁ、出会った時のこととか、付き合った時のことかもがらがらがら～って感じなの？
一樹　いや、がらがらがら～なのは俺の単細胞のことであって、記念日のことはがらがらがら～っていうかこう濁ってというか、かすんで見えづらくなるみたいな
優愛　そんなことどうでも良くて！
一樹　いや、どうでも良くないよ？がらがらがら～っていうのはさ、完全崩壊に

近いわけで、こう「ん～？（目を細めこする仕草）」みたいなのは崩壊してるわけじゃなくてそこにあるんだけど

優愛　んー！それはわかったから！何がきっかけかとか覚えてないでしょ？

一樹　覚えてるよ！

優愛　えー？じゃぁ何？

一樹　宗教学の授業。一年のときの。

優愛　ふーん。覚えてるんだぁ。

一樹　覚えてるよ。お前なんか浮いてたもん。

優愛　え、そうだった？

一樹　うん。あのさ、先生がウェディングドレスの写真集持ってきた時。

優愛　お。

一樹　それ見てたらお前が声かけてきたじゃん？

優愛　え？なに、違うよ、一樹が声かけてきたんじゃん。

一樹　え、俺！？

優愛　そうだよ？私が見てたら「きれいだねー」って声かけてきたんじゃん。

一樹　ちっがうよー。俺が見てるところに「いいなー」って話しかけてきたんじゃん。

優愛　いや、ちがうね！わたし絶対あの写真集見て「いいな」だなんて思わないもん！だから私じゃない！

一樹　まぁ、どっちでもよくない？

優愛　よくないよ！どっちが先に声かけたかで色々変わるじゃん！もー、この調子じゃ付き合った時のこと聞くの怖いからもう聞かない。

一樹　あーごめんごめん。

優愛　そんな奴にケーキはやらん。

一樹　え！ケーキ！食う食う！

優愛　せっかく作ってきたのにさー。

一樹　作ったの？すげー。

優愛　一樹の好きなチョコケーキ。

一樹　はー！まめだねぇ！

優愛　ちょっと何その他人行儀な感じ。

一樹　そんなことないよ。

優愛　だってそうじゃん。

一樹　いやいや。

優愛　せっかく作ってきたのに。それに肉じゃがだって一樹が食べたいかなって思って…一周年だし、大切な日だからってがんばってさ。

一樹　いや、思ってるって、ありがとうって、嬉しいもん。

優愛　ほんとに？
一樹　ほんとほんと。超嬉しい。
優愛　（納得いかない様子）
一樹　ねぇ。もっとさぁ、気楽にいかない？
優愛　…え？なに？
一樹　なんか、なんかさぁ、もっと穏やかに思い出を語ろうよ～。ほら、さっきも「意味がある」って言ってたじゃん？すっげぇそういうのを見つけようとしてるっていうか、確かめようとしてるっていうか。たまに、お前ってその「意味」のために俺と一緒にいるように思うんだよね。
優愛　なにそれ…
一樹　そうそう、本で読んだことあるんだけど、人間って昔、猿だったでしょ？
優愛　…は？なにいきなり？
一樹　まあ聞いて。

俺たちは元々四足歩行だったじゃん？それがなんかわからないけど、たまたま、お猿さんが、地面から手を離しちゃったんだよね。一大事だよ、それ。だって今までとは全然見える世界が違うんだよ？それは多分、田舎の平屋で暮らしてた奴が六本木ヒルズのてっぺんに住むくらいのことだと思うんだよね。最初は「おお～！」と感動するわけだよ、田舎もんはさ。「これが都会～ギロッポン！」ってな感じで。でもさ、段々びびってくるのよ。だって、今までずっと土踏んで生きてたのに、窓に寄れば…お～高っ！地上は遥か下。無理だよ、「人は土から離れては生きられない」ておとぎの国の王女様も言ってるのにこんな天空の城近くにきちゃったらパニックだよ田舎もんパニック。滅びの言葉叫んじゃうよ。立ち上がるってのはそれだけの不安を伴う。しかも、二足歩行ってのは動物としては非実用的だし、種族繁栄において超効率悪いんだよね。口と手の距離が離れちゃうわ、急所の心臓とか腹は丸見えだわ、チンコもマンコも下向きで隠れてて欲情できねーわ。「なんで立っちゃったんだろ、とっても、生きづらいです。」て思ったところでもう後戻りはできない。で、思いついたのが、天国と地獄っていう世界。立つことで天国により近くなったーとか、頭は神聖なもの、足は汚れ、とかさ。あとは…愛…とかね～（笑）そうやってこの後戻りできない状況になんでもかんでも「意味付け」をしていくわけよ。人は成る可くして立ち上がった、って動物と人間様を区別するためにね。俺はさ、そんな意味付けよりも「ギロッポン！」っていう最初の単純なインパクトとかのほうが、なんかゾワゾワする。下が地獄だろうが汚れてようが、んなこと関係なく動物みたいに這いつくばって腰振ってる方がよっぽど「頑張ってんな～！」って思えるし、いいねー！って思うんだよねぇ。以上！

千春の部屋２

優愛　以上。（一樹の「以上」と被って。ゆっくり千春部屋に戻って行く。）
千春　…なるほど。
優愛　…って言われてもな～って感じですよ。
千春　ははは
優愛　んなこと言ったって、もう私たちはとっくに二足歩行なんだよって感じなんですよ。
千春　歩いちゃってるねぇ。
優愛　ったくさぁ。
千春　で、優愛ちゃん動物に、なったの？
優愛　なんちゅう質問だよそれ。
千春　いや、そこは大事なことですよ。
優愛　まぁ、私なりにね、なったよ、動物。なったフリだけどね。
千春　へぇ…何をイメージしたの？
優愛　え？…豹？
千春　うわ～…
優愛　やめてよその反応。
千春　だって…豹って…もうその典型的な感じがさぁ…女豹って
優愛　女豹なんて言ってないし。まぁ、女豹なんだけど…
千春　なれたの？
優愛　いや、もう意識しすぎて結果的に発情した雌鶏みたいになっちゃったよね。
千春　それ、四足歩行でもないよ。
優愛　うん。…にしてもさぁ、こんな話でまとめられたくなかったんだけどなぁ。
千春　記念日、忘れてたこと？
優愛　だって、１年目の記念日だよ！？５年とか１０年とかだったらまだしも、１年目くらい頑張ってほしかったじゃん？
千春　でもさ、元々一樹くん忘れっぽい性格だし…。結構忘れ癖エピソードいっぱいあるじゃない？
優愛　それはわかってるんだけどさ…
千春　それに、一樹くんのそういう天真爛漫なところが好きなんでしょ？
優愛　まぁ…ね…
千春　なら。
優愛　でも私は形としてなにか示してほしかったの～！特別だよって！確かめたいのよ！忘れられるのってどんだけ悲しいかあいつはわかってないん

だああ！**（ゴロンと寝転ぶ）**

千春　まあまあ。いいじゃない、優愛ちゃんは覚えてるんだから。それに一樹くん、ちゃんと感謝してるよ。

優愛　**（千春の様子をうかがう感じで）**…今度

千春　え？

優愛　…会いに行ってみる？

千春　…

優愛　…うん。あ、そうだ。あれ、どっちだった？

千春　あれ？

優愛　声かけた方。私？一樹？どっちだったか覚えてる？

千春　あ、それはね。一樹くん。

優愛　ほーら！やっぱり！絶対そうなんだよ。ったく一樹ったらどうしようもないなぁ。**（泥のように千春部屋から流れ出て行く）**

千春　うん、ほんとだね。

（流れ出て行く優愛を見つめながら）

優愛ちゃんは、いつも私に聞いてきました。一樹くんとのこと。家族とのこと。友達とのこと。身の回りのこと。全部。

誰かに、私に、こたえを言ってもらわないと気が済まない女の子なのです。

その中でも一番聞いてきたのは、理央ちゃんのことでした。

（スピーカーから聞こえて来る優愛の声）

理央、何時に来るの？

理央、会社でうまくやってるのかな？

いくつ内定もらってるって、理央？

理央と鈴木、付き合うらしいじゃん。

大学では理央ってどんな感じなんだろ。

理央はいつも通り中間試験バッチリだね。

昨日、理央と鈴木、会ってたんだよね？

理央ちゃんも同じ中学校行くって言ってたよね？

りおちゃん、バレンタインだれにあげるんだろ！

えんそく、りおちゃんおやつなにもってくるとおもう？

おたんじょうび、りおちゃんなにほしいって？

りおちゃん、あしたもあそびにくるかなあ？

あのこ、なんてなまえ？

理央との出会い～7歳の春～

千春　ひっこしてきた子？
優愛　そう、あのおんなのこ。
千春　りおちゃんだって。みよじがおおたにで、なまえがりおちゃん！おたんじょうびがつぎのにちようびで7さいになるんだよ！
優愛　わ！ゆあも7さいでおんなじ！りおちゃんかあ～。なまえもおんなじ、2もじだね。
千春　2もじ～！
優愛　でも、あたしとちがって、かわいいなまえ。
千春　ゆあちゃんもかわいいなまえだよ。
優愛　かわいくないよ、じぶんのなまえ、きらいなんだもん。
千春　かわいいよ。きらきらしたなまえだもん。きらきらねーむだよ。
優愛　ぜんぜんすきじゃない。ちがうのにかえたい。
千春　そんなことといっちゃだめだよ。
優愛　だってね、ゆあってなまえはね、やさしくて、あいのあるこっていういみがあるんだって。
千春　ぴったりじゃん。
優愛　あたし、やさしくないし、あいなんてもってないもん。
千春　そんなことないよ。
優愛　そーゆうちはるちゃんはどんないみがあるの？
千春　えっとね、なんか、ママがね、おうたうたう男の人でね、すきな人がいるの。ほんとはパパがそのひとのことすきだったんだけど、パパがよくママにうたってたんだって。でね、ママね、パパがかえってこないひはいつもその人のおうたうたってるんだけど、その人がね、男の人なのにね、ほーにゃーらーらーちはるっていうんだって。みよじは…わかんないや。でね、ほら、わたしのおねえちゃん、なつみっていうでしょ？
優愛　うん。
千春　なつみのなつとちはるのはるで、なんかきょうだいっぽいから、ちはるってなまえになったんだよ。
優愛　ふーん。でも、ちはるちゃんってたんじょうびっていつだっけ？
千春　12がつ。
優愛　12がつってふゆだよ。
千春　あれ、ほんとだ。まだはるじゃないね。
優愛　うん。

千春　ママ、まちがえちゃったのかな？
優愛　たぶんまちがえちゃったんだよ。
千春　ママ、ちはるよりなっちゃんのほうがすきだからなぁ。
優愛　そんなことないでしょ。
千春　ううん。そうなんだって。なっちゃんはママ似で、ちはるはパパ似だから。
　　でも、でもね！。なっちゃんもおうたの男の人もパパもママもすきだから
　　気にしない！
優愛　そっかー。
千春　それにね
優愛　なに？
千春　ゆあちゃんがちはるのこと、ちはるちゃんってよんでくれるからがまんで
　　きる。「なっちゃんのいもうと」じゃなくて、ちゃんとちはるちゃんって
　　よんでくれるから。
優愛　だって、ちはるちゃんはちはるちゃんじゃん。
千春　そうやってうれしいことといってくれるから、ゆあちゃんはやっぱり、ゆあ
　　ちゃんってなまえなんだよ。
優愛　ちはるちゃんってなまえだってとくべつなんだよ？
千春　とくべつ？
優愛　うん。あ！りおちゃんのおたんじょうびかいしなきゃ！
千春　そうだね。
優愛　ゆあがいちばんにおいわいしてあげるんだー
千春　え、ちはるも…
優愛　じゃぁ、いっしょにね。とくべつなひにしてあげよ！

千春の繭の中１

喋りながら、部屋の隅からトイレットペーパーのように長い布を引きずり出して床にためていく。布には記憶の言葉がびっしりと書いてある。

千春　…とくべつ。
　　とくべつといえばね、わたしのおうちのトイレには、なっちゃんのお受験用にママがつくった「とくべつあんき表」っていうのがはってあったの。漢字とか、算数の公式、歴史の年号、生物器官の名前。トイレ中が紙と文字で埋め尽くされてた。あの狭い空

間にいるとね、私が覚えてればなっちゃんも公式とか年号とか忘れずにいられるんじゃないかって錯覚しちゃって、忘れちゃいけないんだっていう使命感に駆られたの。ほら、同じ血が流れてるからさ、知らない間に、私の血となっちゃんの血同士が電波でも送り合って交信してくれるような気がしたんだよね。だからね、おしっことかうんちとかすると覚えたことが一緒に身体の外に出て行っちゃうような気がして、「出しちゃだめだ！出ちゃだめだ！」って頑張っちゃって、トイレでトイレができなくなった。あ、もちろん出るもんは出るから、小学校のトイレとか、お風呂の中とかでこっそりしちゃってたんだけど。でね、ある日、台所でママとなっちゃんがお勉強してたの。そしたらなっちゃんがひとつの問題でつまっちゃったんだよね。私はその時お皿を洗ってたんだけど、水道の音を聞いてたら、ちょうどその答えがトイレの右の下側に書いてあったことを思い出した。「アポトーシス…」思わず呟いた。そしたらね、（**「あー！！！」と影が叫ぶ**）いつも温厚ななっちゃんがすごい形相で怒りだしたの。わたし、びっくりしちゃって、なっちゃんが何を言ってたか全然覚えてないんだけど、ただ、なっちゃんの上昇していく体温と、私のほっぺとか目の中とかに飛んできた唾の冷たい感じとかは、（**影「あー！！！」**）ハッキリ覚えてるんだ。ママは「ちょっと休もうか」って、なっちゃんを部屋に連れてった。ママ、私、ちゃんと覚えてたよ。ちゃんと、ママの作ってくれた「とくべつあんき表」、覚えてたんだよ。でもなっちゃんの部屋から戻って来たママは、ほめてはくれなかった。「どうして邪魔するの？」だって。わたしはただ、ママの書いた言葉を覚えておきたかっただけなのに。なっちゃんにも、ママにも、電波、届いてなかったみたい。

とくべつなんて、いつも、なかったんだ。うまれたときから。なまえ、ようふく、おもちゃ、えほん、くれよん、ぴあの、ばれえしゅーず、れおたーど、さいほうばこ、きょうかしょ、きょういく。**※次の青字の優愛の台詞と重なる**

優愛の憂鬱1

優愛　うまれたときから。なまえ、ようふく、おもちゃ、えほん、くれよん、ぴあの、ばれえしゅーず、れおたーど、さいほうばこ、きょうかしょ、きょういく。いつでもしんぴん。いつでもとくべつだった。

優愛母　優愛ちゃんのお名前にはね、素敵な魔法がかかってるのよ。

優愛　どんなまほう？

優愛母　優しくて、愛のある子になぁれ、っていう魔法。

優愛　へー…ゆあ、ちゃんとまほうかかってる？

優愛母　うん。もちろん。ちゃんとかかってる。しかもね、この魔法がかかってると、優愛ちゃんだけじゃなくて、優愛ちゃんの周りの人もみーんな、優しくて愛のある人たちになるんだよ。

優愛　ゆあだけじゃないんだ！

優愛母　そう。ちゃんと魔法のこと忘れないでいたら、自分にもお友達にも優しくできて、愛される子になれるの。ママは優愛ちゃんにそういう子になってもらいたいの。

優愛　ママみたいに、すてきなおよめさんになって、すてきなママになれる？

優愛母　うん。必ず、幸せになれる。

優愛　うん！ママ！わたし、ちゃんとなるよ。ちゃんと。ちゃんと。

いつでも特別だった。生まれたときから。首が据わるのも、ハイハイも、喋るのも、歩き出したのも、全部周りより早かった。ピアノもバレエもお絵描きも勉強もかけっこもお裁縫も、苦手なものはとくになくて、どこに行っても特別だった。

優愛母　今日も理央ちゃんと一緒に遊んだの？

優愛　うん！ちはるちゃんのお家であそんだよ。

優愛母　そう。

優愛　りおちゃんね、すごいんだよ！がっこうでも、すぐもんだいといちゃうしね、かけっこもとってもはやいの！おうたもじょうずだしね、ぴあのも、ゆび、すっごいはやくうごかせるんだよ！それにりおちゃんはねぇ…ふふふ…モテモテなんだよぉ！

優愛母　そうなの。

優愛　はぁ。りおちゃんはいいなぁ。

優愛母　…どうして？

優愛　だってりおちゃん、いろんなことできるのに、やさしくて、とってもかわいいんだもん。ふわふわのかみのけでね、おようふくもかわいくてね。いいなーって、みんないってるよ。みんなりおちゃんのことがだいすきなの。

優愛母　そうね。でも、そんなことじゃだめよ。

優愛　え？

優愛母　優愛ちゃんだって、なんでもできるじゃない。勉強もできるし、かけっこも速いし、ピアノも上手でしょ？理央ちゃんのこと、いいなぁって言ってるだけじゃだめよ。優愛ちゃんは頑張りやさんなんだから、もっともっと頑張れるはず！優愛ちゃんは、特別な子なんだから。

優愛　うん！ママ！わたし、ちゃんと頑張れるよ。ちゃんと。ちゃんと。

いつでも特別じゃないといけなかった。間違えちゃいけなかった。特別なフリをしていないといけなかった。どこに行っても特別だった。

友人１　おーまた一位。
優愛　ギリギリね。
友人１　どこが。
優愛　いや、ギリギリ。
友人１　絶対一位と二位は優愛と理央だもんなぁ。
優愛　逆転するのはいつのことやら。
友人１　理央もすごいよねぇ。
優愛　ほんと。なんでもできるからね、理央は。
友人１　優愛も負けてないじゃん。
優愛　いやぁ、毎回ハラハラしてんのよ？
友人１　またまたー。あ、そだ。放課後どっか行かない？
優愛　あーごめん。今日３人でご飯食べる日なんだぁ。
友人１　でた。入学してから一度も見たことない幽霊生徒。
優愛　そんな言い方ー。
友人１　ごめんごめん。でもさぁ面白い組み合わせだよね。
優愛　そう？
友人１　ザ・マドンナ理央と、イケメン女子優愛に、…引き籠もり。
優愛　なんか肩書き古くさくない？
友人１　あそう？え、もう何年外出てないの、その子？
優愛　もう４年かなぁ。
友人１　へぇ！すっごいねぇ。ねぇ、どんな子なの？
優愛　えー…普通の子だよ。
友人１　ふつうー？
優愛　まぁ、ちょっと人見知りだからね、うまく対応できない時とかあるけど、仲良くなれば結構喋るし、良い子だよ。
友人１　引き籠もりが。普通ねぇー。
優愛　ほんと、全然普通だからさ、機会あったら今度遊びに来てみてよ。私たち以外にも友達できてほしいしさ。

友人１　えーいいよいいよー。なんかこわいもーん。
優愛　全然こわくないよ。
友人１　え、ねぇ、なんでその子と付き合ってんの？
優愛　なんでって？
友人１　幼なじみなんだっけ？ボランティア精神？
優愛　そんなんじゃ…
友人１　じゃあなに？
優愛　大事な…友達だから。いつかは一緒に学校これたらなぁって思うし。ちょいちょい外には誘い出してるんだけど…なかなか。
友人１　へー、すごいね。えらいわ。
優愛　いや、別にえらいことないんだけど。
友人１　でもさ、それって一生続けらんないよねー。
優愛　え

友人１　あ、見て！
優愛　…なに？
友人１　３組の染谷。あいつ、今日理央呼び出してるらしいよ。
優愛　また玉砕組か。
友人１　みんな誕生日デート狙ってるんだよ。祝ってーもちあげーゴール！みたいな。
優愛　あー来週だもんね。理央も大変だ。
友人１　理央には鈴木がいるのにねぇ。
優愛　まぁ付き合ってはないけどね。
友人１　プレゼントとかいくつ貰うのかなー。より取りみどりでほんと、羨ましいわ～。
優愛　モテすぎるのも大変だね。モテてみたいわ、あんな風に。
友人１　何言ってんのー、そんなこと全然思ってないでしょ？
優愛　えーモテてみたいよー。理央みたいに。
友人１　優愛はそんなことよりやることがあるじゃん？ほら、「男より勉強」みたいなタイプだし。
優愛　なんだそれ。
友人１　実際さぁ、男子とかマジ子供だからさ、優愛じゃ釣り合わないって。ほら、優愛は一人で生きていけそうじゃん？でも、理央は誰かに守ってもらわないといけないわけ。「俺が守ってやる」って猿どもがうじゃうじゃいるわけよ。
優愛　わたし、全然そんなんじゃないのにな。

友人1　いやいや、優愛は特別なの。逆に「私が守ってやる！」って感じだもんね。正義感の塊っていうか！あ、幽霊生徒のこともそうなのかな。いやー。かっこいいよ、あんたは。

千春の部屋3

優愛、千春部屋に勢いよく倒れ込む。

千春　染谷君でしょ？
優愛　え、なんで知ってんの？
千春　昨日、理央ちゃんが言ってた。
優愛　へー。ほんと噂まわんの速いよー。こわいこわい。
千春　ほんとだねぇ。
優愛　染谷君ってどんな子か全然知らないんだけど。
千春　明るくて人当たりがいいし、サッカー部のエースで結構女子にも結構モテるって理央ちゃん言ってた。
優愛　出た！サッカー部マジック！大嫌い、そのイメージ！
千春　優愛ちゃんのそれもイメージの話だよ。
優愛　(たしかに、という間)
…遅いねぇ、理央。
千春　断るのに時間かかってるんだよ。
優愛　そんなしつこいの？
千春　粘り強いらしいから。エースは死守したいんだよ、誕生日の予定を。
優愛　あっそ。どーでもいいけど。
千春　あはは
優愛　…あ、そういえばさぁ。
千春　ん？
優愛　昨日、理央何してたか、知ってる？（あくまでも責め立てない）
千春　え？
優愛　昨日。なんか言ってた？
千春　…わかんない。
優愛　え、理央絶対話してるでしょ？
千春　わかんないよ。
優愛　わかんないじゃなくて、知ってるか知らないか、聞いたのか聞いてないのかなんだけど。
千春　わかんないよ。

優愛　じゃあ言うけど、昨日さ、理央、鈴木と会ってたんだよね？
千春　…
優愛　会ってたんだよね？
千春　…
優愛　私、見ちゃったんだー。２人が歩いてるの。理央、塾の日なのにさ。
千春　…
優愛　２人、付き合っちゃうのかなー。
千春　…
優愛　まぁお似合いだけどねぇ。
千春　…
優愛　でも、「おめでとう」って言ってあげられるかなぁ。だって、理央の初めての彼氏でしょー？やっぱ複雑だよねー！
千春　…
優愛　ねぇ。
千春　…
優愛　付き合ってるんだよね？
千春　わか
優愛　わかんなくないでしょ。
千春　…
優愛　ねぇ。
千春　…はい。
優愛　…ほらぁ！やっぱり！私の見た通りだったぁ。
千春　…
優愛　ね！
千春　…ごめんね。
優愛　え？え？何が？
千春　いや、だって。
優愛　うん。え、何？
千春　…優愛ちゃん、好きだったんだよね。鈴木くんのこと。
優愛　え、ちょっと待って、何それ。びっくり。そんなわけないじゃん！私がさいつ鈴木のこと好きっていったの？なにそれ、おっかしー。
千春　…でも、優愛ちゃん、入学した時に付き合うなら鈴木くんみたいなのが良いって言ってたから…。
優愛　それはさぁ、その時のノリってもんじゃん。ノリ。やだ本気にしないでよ。
千春　…
優愛　仮にね、好きだったとしてもさ、私は嬉しいよ。好きな人が理央を選ぶっ

てこと。そこら辺の頭の悪い女と一緒になんてなったらたまんないもん。
やっぱり私の好きな人は見る目あるなぁって、そう思うと思うんだ。
千春　そうだよね。うん、ごめんね。
優愛　ま、あくまでも、仮だけどね。
千春　…うん。
優愛　…ごめん、行かなきゃ。
千春　え！ごめんね、優愛ちゃん、もうなんにも言わないから！
優愛　…ただ、ちょっと行かなきゃいけないだけ。
千春　ごめんなさい。
優愛　あとは、よろしく。またね。

優愛、千春部屋を出て行く。

千春の繭の中２

千春

部屋の、扉を、閉める。階段を１段、２段、３、４、５、６、７、８、９、１０、１１、１２。靴を、右、左。姿勢を正したら、玄関のドア。あける。

あの日も一緒だった。なっちゃんのお受験が失敗して何日かたったとき。公園から帰ってきた私はママに言った。「ねぇ、ママ。パパ、今日はお仕事お休みだったの？お友達と２人で遊びにいってたよ。」ママは黙り込んだあと「部屋に行きなさい」って言って、なっちゃんの部屋にヨロヨロ歩いて行った。私は言われた通り部屋に行って、ベッドの上でゴロゴロしながら鼻歌を歌ってた。しばらくして扉が開くと、大きいボストンバッグを２つ抱えたママと、林間学校みたいなリュックを背負ったなっちゃんが立ってた。

千春母　…ごめん、行かなきゃ。
千春　え…ごめんなさい、ママ。もうなんにも言わないから！
千春母　…ただ、ちょっと行かなきゃいけないだけ。
千春　ごめんなさい。
千春母　あとは、よろしく。またね。

そう言って、私の頭をふっとなでた。閉まっていく扉の隙間から、もう一生振り向かない俯いた２つの顔を見つめる。**（優愛、何も描いていない額縁に、黒いクレヨンで**

幼稚園児が描きそうな似顔絵を描いていく）見えてるうちに、この人たちの顔をよく覚えておかなきゃって思ったのに、あれ、そもそもこの人たちの顔を私はちゃんと見たことがあったのかな、なんて疑問にさえ思えて、まだ、そこにいるはずなのに、もう、思い出せなくなってた。なっちゃんの笑い声。パパの広い背中。その背中を見つめるママの緩んだ口元。あったかい食卓。扉が閉まると同時に全部が、パーン、（**優愛のクレヨン、折れて床に落ちる**）ってはじけ飛んだ。残ってるのは手の感触だけ。「あとは、よろしく。」って一体何をよろしくしなきゃいけないんだろう。もう、よろしくできないくらい、粉々なのに。

優愛ちゃん、忘れられるのも悲しいけど、思い出せないっていうことも、結構しんどいんだよ。

優愛の憂鬱２

優愛母　テスト、どうだったの？
優愛　うん、まぁ、いつも通り。
優愛母　そう。
優愛　うん。
優愛母　さすが。
優愛　うん。
（間）
優愛母　あ、そういえば昨日ね、理央ちゃん見たの。
優愛　いつも見てるじゃん。
優愛母　ちがうちがう！商店街で！男の子と歩いてたのよー。
優愛　そりゃ、私だって歩くよ、男の子と。
優愛父　歩くのか？
優愛　歩くよ、そりゃ。
優愛母　いや、そういう感じじゃなくてね、そういう感じっぽかったのよー。
優愛　へぇ。
優愛母　あの子、見たことあるのよね。
優愛　鈴木でしょ？
優愛母　すず…き…
優愛　中学の頃の生徒会長。
優愛母　あー！そうだそうだ！え、何？付き合ってるの？
優愛　さあ。
優愛母　さぁって…。でも、余裕ね理央ちゃん！この時期に男の子と歩いてるなん

て！さすがだわ！
優愛　…。
優愛母　優愛ちゃんはそういう子いるの？
優愛　え、なんで？
優愛父　いるのか？
優愛　いや、いないけどさ。
優愛母　まあそうだと思ったけどね。今は勉強が恋人じゃないとね。
優愛　あのさ、それなんだけど。
優愛母　なに？
優愛　私、受験してみたい大学があって…。
優愛母　え？どこ？何学部？
優愛　いや、何学部っていうか…
優愛母　うん。
優愛　服飾の大学受けてみたくて…私、ウエディングドレスをつくりた…
優愛母　やだ、何言ってるの、今更。やめてよ～。普通に大学行って、普通に勉強して、ちゃんとした企業に就職して。女の子だって男の子に負けずにそうならないと一人前になれないわよ？そう言われるのわかってて言ってるんでしょ？
優愛　…うん。
優愛母　大丈夫、人生は長いんだから、そんなこといつだってできるわよ。
優愛　そうだね。
優愛母　あ、だからなの？
優愛　え？
優愛母　最近、ちょっと化粧とかしてるでしょ？
優愛　…
優愛父　してるのか？
優愛　ほんと、ちょっとだけだよ…
優愛母　もー。校則で駄目って言われてるでしょー。そのままで十分なんだから。学生らしくいなさい。
優愛　うん、わかった。今日はもう、寝るね。

小さい頃　お母さんの化粧台から出てきた写真
一人の花嫁さん
白い、白い、純白の、ウエディングドレス
「幸せ」って　形になったら　こんな形になるんだ　って思った
これを着たら　わたしも　わたしのなまえも　目に見えるんじゃないかって思った

これを着れば　絵に描いたような女の子に見えるんじゃないかって　思った
なんでも許してくれる　純白　　乙女　処女　の　白

優愛母　会議、どうだったの？
優愛　うん、まぁ、いつも通り。
優愛母　そう。
優愛　うん。
（間）
優愛母　あ、そういえば昨日ね、理央ちゃん見たの。
優愛　いつも見てるじゃん。
優愛母　ちがうちがう！商店街で！男の人と歩いてたのよー。
優愛　そりゃ、私だって歩くよ、男の人と。
優愛父　歩くのか？
優愛　歩くよ、そりゃ。
優愛母　いや、そういう感じじゃなくてね、そういう感じっぽかったのよー。
優愛　へぇ。
優愛母　あの人、見たことあるのよね。
優愛　鈴木でしょ？
優愛母　すず…き…
優愛　中学の頃の生徒会長。
優愛母　あー！そうだったそうだった！え、何？まだ付き合ってるの？
優愛　みたいだよ。
優愛母　みたいだよって…。でも、理央ちゃん！いいわねー！結構素敵な人だったわよー。かっこ良くて、仕事できそうで。しかも中学時代の同級生と社会人になってからも続いてるなんてドラマチックねー！さすがだわ！
…。
優愛　優愛ちゃんはそういう人いるの？
優愛母　え、なんで？
優愛　いるのか？
優愛父　いや、まぁ。
優愛　どーせ優愛ちゃんは相手にしてないんでしょ。今は仕事が恋人だもんね。
優愛母　どうかな。
優愛　もう、どうかなじゃないわよ～。女の子なんだから仕事もほどほどにして、
優愛母　ちゃんと良い人見つけないと！私だって優愛ちゃんのかっこいい旦那さんが見たいし、可愛い孫がほしいもの～。女の子だったら、結婚して、子

供産んでからが！一人前なんだからね！
優愛　…うん。
優愛母　人生あっという間なんだから。いつだってできるってわけじゃないのよ。
優愛　そうだね。
優愛母　最近、化粧も手抜いてるでしょ？
優愛　…
優愛父　そうか？
優愛　ちょっとだけね。忙しいからさ。
優愛母　もー。愛されるためには、女の子捨てちゃだめよぉ！そのままで十分なんて年齢過ぎちゃってきてるんだからね。
優愛　うん、わかった。今日はもう、寝るね。

ウェディングドレスってね、大昔はどんなに社会的地位が高くたって、処女じゃない人は着れなかったの。顔にかけるベールなんて特にそうだったらしいよ。処女の恥じらいをベールの下に隠すんだって。
ねぇ、処女じゃないくせにそんなもの着る気持ちってさ、どんなもんなんだろうね。
あの純白の下、本当はどんな色してんだろうね。
こんな淀んだ考えも、あの純白は、許してくれるのかしら。

千春の部屋４

優愛、千春部屋には入っているが、千春に背を向け遠くを見つめ立っている。

千春　優愛ちゃんママ、相変わらずだね。
優愛　いやぁ。そういうこと言われる歳になったんだよ。嫌んなっちゃう。
千春　でも、別にいいじゃん。優愛ちゃんは優愛ちゃんなんだし。
優愛　そうでありたいんだけどさぁ。そうはさせてくれないのよ。
千春　何が？
優愛　何がって…何だろうね。別に何にもないんだろうけどさ、ほんとは。
千春　気にすることないよぉ。優愛ちゃんのやりたいようにやればいいじゃん。
優愛　そうなんだよ。そうなんだけどさ。
千春　無理しちゃだめだよ。
優愛　…
千春　ね。
優愛　…もうさ、大人なんだよ。私たち。残念だけど。
千春　…

優愛　ちょっとは無理しなきゃ駄目なんだよ。
千春　…
優愛　千春もさ、大人なんだよ。
千春　…
優愛　どうするの？この先。
千春　…今までどおり
優愛　が続かないのはわかってるよね。
千春　…
優愛　ねぇ、ちょっとだけ、外に出てみようよ。

優愛の悪夢

優愛、千春部屋にためられた布を自分の身体に巻き付けながら喋る。

そう千春に言った日。夢を見た。
純白のウェディングドレスを着ている私が　立っている
ベールで顔が隠れているし、ドレスで全身覆われてるけれど　多分　私だ
鏡の前へと歩いていき、ゆっくりとベールを取る
鏡にうつっている私の顔は　空っぽ
驚いて　慌ててドレスの裾をたくしあげる
おっぴろげた2本の足が無事に存在していることに安心したのも束の間ヴァギナから満員車両の山手線が空っぽの顔面目掛けて飛び出してきた
飽和状態の車両　の中に　血まみれの　雌鶏頭の女
周りの人が声をかける　「あんまりご無理をなさらず」
すると雌鶏頭は血反吐を吐きながらに応えた
「ご無理でもして頑張んなきゃどこにも行けないんです」

夢はそこで終わる。
夢は終わっても、取り巻く淀んだ空気は全く変わらない。
そう。ご無理でもしなきゃ、どこにも行けない。
どこかに行くには、必要なこと。
ベールを被ること。

だから、私、今から。恐縮ではございますが。眠る前のご挨拶。
それが、この世界のあり方かと思いますので。
恥を忍んで、ご無理をして。頑張って。

一曲、歌わせて頂きます。

優愛、歌う。

『道化者』

もうすぐ終わるよこんな夜　朝はきっとやって来る
何度聞かされた台詞でも　気付かないフリ道化者
甘い毒に身を委ねれば　信じることなどお手の物
お望みとあらば今ここで　華麗に舞ってみせましょう

唇噛み締め　血の涙を流しながら　それも肥やしと笑い　生きていく

おまえ　嘘をつき続けろ　終わらないごっこ遊び
その覚悟がないなら近づくな
おまえ嘘をついてくれ　馬鹿正直になることはない
なかったことになんてしたくはないから

全ての力を込めて歌う優愛。サビではミラーボールも降りて来る。安っぽいカラオケ、スナックのようなイメージで。

社交場

カラオケで遊んでいる。全体的に悪気の無い雰囲気で。

友人２　これ誰の曲？
優愛　いや、超マイナーだから絶対わかんないよ。
友人２　よく知ってるね、こんな曲。
一樹　初めてじゃんこんなの歌うの。
優愛　ちょっと変化球。
一樹　ふーん。千春ちゃんは何が好きなの？
千春　…え…

一樹　歌手。

千春　…

優愛　あ、ごめんね、千春、こういう場なれてなくて。

一樹　いや、いいよそういうの。今時、いいね。

優愛　うっさい。

一樹　お前もこんな風に潮らしくしてくれればなぁ。

優愛　ごめんなさいね。潮らしくなくて。

友人２　何歌おっかなー。

優愛　どんどんいれちゃいなよー。

友人２　カエラ歌おうと思ってたのに理央ちゃん歌って帰りやがったからさぁ。

優愛　いいじゃんダブっても。好きなの歌っちゃえよー。

友人２　いや、理央ちゃんとダブりは嫌だ。比較が辛い。

優愛　たしかにー。えーじゃぁ私なに歌おっかなぁ。

友人２　AKB歌おうよー！

優愛　あ、それ、いっちゃう？

千春　…（ものすごい小さい声で何を言っているかわからない）

一樹　え？

優愛　え？

一樹　いや、なんか千春ちゃんが。

優愛　どうしたの？

千春　……まつやま…

３人　？

千春　…まつやま…ちはる…

３人　…

一樹　あぁ！歌手ね！好きな歌手ね！

友人２　だれそれー？しらなーい。

優愛　え？知らない？

一樹　俺知ってるよ。あのずっと走りつづけてる人…

千春　それはサンプラザ中野。（これは譲れないとばかりにすかさず）

一樹　あれ？違った？

優愛　ハゲ違いだよ。

一樹　あ、そっか、じゃぁ知らねー。

優愛　あんたってほんとに適当だよね。
一樹　だっておっさんの曲わっかんねーよ。
友人２　渋いねーうけるー
一樹　え、お前そんなのも聞くんだ？
優愛　あぁ…ちょっとだけ！あんまり詳しくないんだけど千春が好きだから自然と覚えちゃったんだよね。
全員　（少しの沈黙）
優愛　…でもねっ！なかなか結構いいんだよ～。
一樹　そうなんだぁ。
優愛　小さいころから千春がずっと歌ってる歌があってさぁ。お母さんが歌ってくれた曲なんだよ、ね？でさ、毎年それぞれの誕生日を千春ん家で祝うんだけど、決まってその曲をかけてくれてるんだよねぇ。そんで理央と３人で歌うの。
友人２　なにそれー変なのーうけるー
優愛　なんか決まりなの、それが。お決まり。
友人２　うけるーうけるー。え、それ入ってる？
優愛　あ、どうなんだろ。
友・一樹　さがそーさがそー！聞きたいなぁ、千春ちゃんの歌。
千春　え…
優愛　でも、千春こういうところで歌ったことないからね！なんとも、ね！
友人２　じゃあ優愛とデュエットしてよデュエット～。
優愛　千春、一緒になら歌える？

千春、こたえられず固まる。

優愛　…とりあえず歌っちゃいまーす！ワントゥースリーフォー！！！

千春と優愛の思考回廊

千春

マイクを拾い、喋りだす。優愛と影はパラパラのようなものを踊っている。

その日の優愛ちゃんは、白いワンピースなんてものを着ちゃってた。
いつも、そんなの着ないのに。しっかり化粧もしてた。せっせと飲み物に気を配って

た。声だって、いつもよりも1オクターブ高かったんじゃないかな。
歌うことが恥ずかしかったんじゃなくて。私は、そんなもののために、この歌をとっといたんじゃない、ってちょっとムキになっちゃったんだ。そんな白いワンピースを恥ずかしげもなく着た優愛ちゃんを見て。ゆらいで、にじんで、かすんでいく優愛ちゃんを見て。とても、かなしくなった。
どうしてあの人たちは、あんまり知りもせずに優愛ちゃんのことを定義するのか。優愛ちゃんは、AKBとかそんなの全然好きじゃなくて、藤圭子とか中島みゆきとかが好きなんだよ。松山千春だってほぼ全曲歌える。「ワンピースなんてめんどくさい」って言って3日おんなじ服着ちゃうんだから。これが、本当の優愛ちゃんなのに。

段々とヒートアップしていく優愛に、影、マイクを差し出す。

優愛　理央が結婚かぁ。
千春　まだそうかわからないじゃん。
優愛　千春が一番そうだってわかってるでしょ。
千春　んー
優愛　でも…正直、ちょっと複雑だよね。
千春　ふくざつ？
優愛　もしそうだとしたとき、それを聞いたとき、私、「おめでとう」って喜んであげられるかなぁ。
だってさ、結婚したら今までみたいに誕生日会とか…できないよ。
千春　うん。
優愛　ねぇ、私、ちゃんと「おめでとう」って言ってあげられるかなぁ。

2人、マイクをおろす。

千春

「本当」とは何か、それがとても曖昧なことだってことぐらいはわかってる。
でも世界にとっての本当か本当じゃないかなんて私にとっては重要じゃない。
もう、カラオケのこもりきった臭いもかぎたくない。生温いたこ焼きも食べたくない。消毒されてんのかわからないマイクも触りたくない。空虚な電子音もうんざりだし、チカチカする下品な照明も、白いスカート姿の優愛ちゃんも、二度と見たくなかった。
こんな「本当」なら、いらないって思った。

優愛　あ、そろそろ。
千春　…
優愛　行くね。
千春　…うん。
優愛　私の分までちゃんと聞いといてあげて。
千春　わかった。
優愛　頼りにしてるよ。
千春　…うん！
優愛　じゃ、よろしく。またね。
千春　（出て行こうとする優愛を引き止めるように）優愛ちゃん。
優愛　？
千春　……今日は……肉じゃが、だね。
優愛　…ふふっ！正解！
千春

いつもの道のり。いつもの肉じゃが。だけど、当分のあいだ、彼女はいつもみたいに帰ってくることはないって、なんとなくわかってた。

部屋の、扉を、閉める。階段を１段、２段、３、４、５、６、７、８、９、１０、１１、１２。靴を、右、左。姿勢を正したら、玄関のドア。あける。家の中と、身体の中が、新しい風で洗われる。さっきとは違う自分に生まれ変われたような気がして意気揚々と大通りに向かって走り出す。**危ない！**という声が頭に響く。突っ切っちゃだめ、いっつもきつく言われてた。優愛ちゃんと私は言いつけを守ってたけど、理央ちゃんは、こっそり突っ切ってるのを、私は知ってる。「理央ちゃん待ってよー！」と言いながら少し行ったところの横断歩道を渡ると商店街のガード下。本屋に豆腐屋、その隣の肉屋のおばあちゃんはいつもいい匂いの消しゴムとか可愛いシールとかをくれる。中華料理屋に八百屋、洋服屋。どこもみんな顔見知りだけど、ゲームセンターだけは入っちゃいけない。怖いお兄ちゃんに誘拐されちゃうんだって。でも、右に曲がるとすぐに交番があるから、何かあれば、おまわりさんが守ってくれる。階段を駆け上がったらもうすぐ駅。駅員さんが急かすように改札ばさみを鳴らしてる。カッカカカカッカッカカカカ。ホームで電車を待つときも、電車に揺られるときも、その軽快なリズムは身体の中で鳴り続けてて。カッカカカカッカッカカカカ。彼の家に近づくにつれてどんどんどんどん高鳴ってく。カッカカカカッカッカカカカ！ドアを開けると、ふわっと、柔らかい香り。きれいに、片付いている部屋。片付けたのは、こ

の家の主、ではない。整った、その場所で。彼女は、野菜を洗いだす。じゃがいも、にんじん、タマネギ。ことこと、ことこと、ことこと。煮込む。そのうち、彼が帰って来る。

ただいま。

おかえり。

肉じゃが？

うん。

いいねぇ。

そう言って、笑い合う。の、だろうか。そして肉じゃがをつつき合って、美味しかったよ、なんて頭をなでる、

というのが、私にとっての「本当」。だけどそれは、世界の本当では、ない。

（これ以降の青文字部分は録音したものを流す）

優愛　ねえ。

一樹　ん？

優愛　話したいことって何？

千春

これが、この世界の、本当。

一樹　実はさ、俺のチームのプロジェクト、海外展開視野にいれてて。俺も、そっち行くかもしれないんだわ。シンガポール。

優愛　へ…えぇ～、すごいじゃん！

一樹　いや、すごくはないんだけどね。ほら、俺ってフットワーク軽いのがイメージっていうか、セールスポイントってところあるじゃん？あ、でもそんな行かないよ。2年だけ。

優愛　…2年。

一樹　すーぐだよ、すぐ。あっという間。

優愛

あれ、前もこんな状況なかったっけ、なんて思い出そうとしたけど、そんなこと、無

意味だからやめた。２年って時間のあっと言う間って、その「あっ」て中にどれだけの「っっっっっっっっっっっ」があるのか数えてみようかとも思ったけど、やっぱりやめた。その果てしなく長い「っっっっっっっっっっっ」の中で、この男は私のことを何回思い出してくれるのだろうか。とも考えようとしたけどそれもやっぱり、やめた。

（これ以降の青字部分は優愛のモノローグの後ろで薄くかかっている）

一樹　聞いてる？
優愛　あ、うん。良かったね。
一樹　おー。
優愛　頑張ってたもんね。
一樹　いや、頑張ってねーよ別に。
優愛　ううん、私は知ってるよ、頑張ってたの。うまくいくか、いかないかってことが重要じゃなくてさ、やっぱりそこに意味があるんだと思うんだよね。
一樹　意味。
優愛　うん、その真摯な姿勢ってのがさ。
一樹　あーんー
優愛　私はそういうのが大切だって思うなぁ。
一樹　…
優愛　とにかく、良かったね。

千春　当分の間、彼女は帰ってこないんだ、と思う。それはもう、きっと私にはどうしようもないことで。私にできることは「またね」の時まで静かに眠りながら待つこと。
今度の誕生日は、いつもどおりにケーキを囲めるように、どこかで思い出せるように。
ここで。
待ってる。

千春、千春部屋中央のテーブルに座り、人形のように動かなくなる。
それと同時に、影の２人も舞台上から消える。
消えて行く影をじっと見つめる優愛。

１人になったことをしっかりと受け止め、ゆっくりと話し始める。

優愛

部屋の、扉を、閉める。階段を１段、２段、３、４、５、６、７、８、９、１０、１１、１２。靴を、右、左。姿勢を正したら、玄関のドア。あける。家の中と、身体の中が、新しい風で洗われる。さっきとは違う自分に生まれ変わらなきゃいけない気がしてうんざりしながら大通りに向かって歩き出す。**危ない！**という声が頭に響く。突っ切ろうとした奴が事故ったみたい。私はなんだかんだ昔の言いつけをなんとなく守っているから突っ切ったりなんかしない。野次馬たちのざわつきを横目に少し行ったところの横断歩道を渡ると商店街のガード下。シャッターばかりの道。残ってるのは本屋と八百屋。肉屋のおばあちゃんはだいぶ前に亡くなったし、ゲームセンターは怪しい介護施設になった。交番の中のおまわりは関心なさそうにボーっと座ってる。エスカレーターをあがり、改札の無機質な電子音。改札ばさみの音を聞いたのはどれくらい前だろう。そんなことを考えながら電車に乗る。何も変わらない、一定の、リズム。

いつかの夢に出てきた山手線が身体の中をぐるぐる回っている。何かにならなきゃという使命感で、吐き気が止まらない。でも、いつの間にか、何かにはなっていて、ならされていて、ならざるを得なくて、たくさんの文字を貼付けられた、私の身体。その、身動きとれない感じが、段々と、生きやすくなってきている。もう、仕方ないんだ。ふと昔、誰かがしてた四足歩行の話を思い出す。は？意味わかんない。って言いながら。本当は意味わかってた。わかりすぎてた。ずっと、犬でも猫でも発情した雌鶏でもいいから変身したかったんだ。変身して、この電車の中を何も考えずに走りまわりたかった。**（泣き声とも、獣の遠吠えとも言えない呻き声）**

でも結局、私は、動物になんて、なれない。まっすぐ、一定のリズムで歩きすぎたから。二足歩行で。歩き続けるうちに、色んなものをどこかに置いて来てしまった。あの、昔よく通ってた、秘密基地からも。だんだんと遠ざかっていって。歩き始めは覚えていたのに、遠ざかるうちに私の中で徐々に薄まっていって、気が付けば、帰り方がわからなくなっていた。もうどれくらいあそこに帰ってないんだろう。

それでも世界は動き続ける。置いてかれないように頑張らなきゃ、世界は許してはくれない。もう戻れない。戻ったらまた、振り出しだ。だから止まらないで、眠らない

で、振り向かないで、進む。その衝動に気付かないフリをし続ければ、そうすれば、いつか、いつか…！

でも…

かすかに松山千春『こんな夜は』が聞こえて来る。遠い日のママの歌声。

優愛　でも、ちょっと思い出すぐらい、良いかな。
いつも、３人でケーキを囲んで歌ったあの歌。
あの時は、歌えなかった、
どうしてだっけ。
わすれちゃった。

朝、起きたら、世界は、変わってくれているかしら。
それはいつの朝になるのかしら。

ねぇ、私。ほんとはちゃんと「おめでとう」って言ってあげたかったんだ。

歌声は少しずつ近くなってくる。
優愛は身体に巻かれた白い布を脱ぎ捨てていく。
そしてゆっくりと、黒いクレヨンの似顔絵が描かれた額縁まで歩いていく。
優しく、壁から額縁を外し、愛おしそうに見つめながら。

優愛の弔辞

千春部屋へとゆっくり向かいながら喋りだす。
誰かに聞かせるわけではなく、自分の中に向かって話しかけるように。

優愛

…その子の部屋はちょっとした秘密基地のようで、小学生の時も、中学生の時も、高

校生の時も、大学生になっても、３人、そこに集まりました。社会人になっても、誕生日とかのお祝い事は絶対３人で集まりました。ずーっとずっと続いてた習慣。すごくないですか？（笑）同じ時間を…同じ時を過ごしてきました。私たちはいつも…一緒で、…いつも…。だから、聞かされた時は本当に驚いたし、まさか私がここでこうやってご挨拶することになるとは想像していなくて、想像なんて、できませんでした。今でも実感が湧きません。

あの日も、いつもどおり私たちはいつもの場所に集まることになっていて…知らせを聞くことになっていました。でも私はたまたま外に出ることになってしまって…後悔していますね。直接、聞くこともできなかったし、言うこともできませんでした。

私、情けないことにまだ言えてないんです。お祝いの言葉。どこかで言ったのかもしれないけど、きっと、言えてない。今…やっと言えます。今更ですが、この場をお借りして言わせてください。

優愛は千春の膝にそっと頭をのせる。

人形のようだった千春の手がゆっくりと動きだし、優愛の頭を優しくなでる。

理央、本当に、おめでとう。

暗転

終